



221号

2017 / 3 / 1

日中文化交流市民サークル「わんりい」
東京都町田市能ヶ谷7-32-12 田井方
〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100
<http://wanli-san.com/>
Eメール:wanli@jcom.home.ne.jp



ギャロンの男の出で立ち ギャロン・チベット族(大渡河源流域の女王谷を意味するギャルモロンに約2000年前から住むチベット族で中国名は嘉絨藏族)の伝統的な舞踊を代表する「ゴージャン」の舞の出で立ちです。ゴージャンには色々なバリエーションがあり、この写真は剣を振り翳しながら舞う時の出で立ちで、間もなく始まる踊りに備えています。(四川省丹巴、2014年2月撮影)

大川健三(四姑娘山自然保護区管理局 特別顧問)

「わんりい」2017年3月号の目次は24ページにあります

厳しかった寒波もようやく北へ去り、これからは少々の余寒はあっても、春は着実に歩を進めていくでしょう。‘わんりい’のお便りが2月はお休みのせいか、新しい年の2か月は、瞬く間に過ぎてしまいました。昔から、「一月は行く、二月は逃げる、三月は去る」と言い慣わしていますが、人々の感覚に即して、「言いて妙」と全く感心するばかりです。

思い返せば、私が‘わんりい’に初めて駄文を載せていただいたのは、2006年の1月でした。その間、独断と偏見に満ちた感想を読んで頂きましたが、殆どが北京の変化の速さに驚いた話でした。これ以上の変化には付いて行けそうもありませんので、この辺でこのコラムも店仕舞いしたいと思います。

最後に一つ、最近身をもって感じた、「中国の変化の速さ」をご紹介します。

お料理がお上手で、‘わんりい’の料理講座で、いろいろな中国料理を教えて頂いている何媛媛さんに、今から7、8年前、月餅を手作りしてみたいお伝えしました。媛媛さんは、「月餅は作ったことがありません。月餅は家庭では作りませんから」とおっしゃいましたが、ネットでいろいろ調べて、試作を重ねて作り方をマスターされ、私達に教えてくださいました。

それから、‘わんりい’の「時無し月餅」作りが始まりました。月餅は本来、中秋節のものですが、‘わんりい’では冬でも夏でも月餅を作り、皆で感想を述べあいました。やれ甘すぎる、いや甘味がたりない、ナッツはもっと細かく、いや粗い方が良いなどなど、いろいろな意見の間を揺れ動き、まあまあこんなものかと認めてもらえるものが出来るようになって、‘わんりい’ブランドの月餅が完成しました。

そして最近、別の中国の方に、「中国では、月餅を家庭で作らないそうだから、この月餅作りを覚えて行って、中国のお家で作ってあげたら喜ぶでしょう？」と話したら、その方は、「今では、オーブンがあるのでケーキやクッキー、パンや月餅まで、中国でも家で作ります」とおっしゃいました。確かに、家

庭での月餅作りにオーブンの普及は不可欠です。

そういえば、初めて行った頃、北京のお家の台所は、他の部屋の調度と比較して随分質素でした。革命では、「天の半分は女性が支える」との考えから、男女の区別なく働いて、育児や食事などはコミュニティ全体で分担したそうで、2000年頃も、朝食でさえ外で食べるのが普通でした。

それが2003年頃から、中国の経済発展に伴って、住宅の新築ブームが始まりました。中国の住宅分譲は、コンクリートの外側が出来た状態で売られます。住宅を買った人は、入り口のドアや床・天井・壁は勿論、バスタブやタオルハンガーの位置まで自分で決めなければならないのです。傍で見ていてとても大変そうでしたが、同時に羨ましかったのは、スペースがゆったりしていることでした。決して高級マンションではないけれど、1戸100平米以下の住宅はないのです。皆120～130平米あって、バスルームは必ず二つありました。

台所のスペースも大きく、選ぶのに面倒が無いので、オーブンを組み込んだシステムキッチンを備えるお宅が殆どです。現在、北京のオーブン普及率は、きっと電子レンジに組み込んだオーブンを含めると、日本のそれと遜色ないでしょう。日本では1950年代に、映画やテレビドラマで、アメリカの家庭の台所でオーブンが活躍するのを見て、ガスコンロの上に乗せて使う上置き式オーブンが使われ始めてから、2000年を過ぎた頃に電子レンジに組み込んだ電気オーブンが普及して、やっとほとんどの家庭でオーブンが使えるようになりましたが、その間、50年以上かかっています。それを中国は、20年足らずで追いついてしまったのでした。

このような変化が生活のあらゆる面で起こった北京の生活に、片足入れた状態で体験できたのは、楽しい経験でした。そして、それを皆様に読んで頂けたのは望外の幸せでした。

長い間、勝手な言い草にお付き合いくださいまして、ありがとうございました。
(終わり)

bì yě kuáng juàn hū
必也狂狷乎！きょうけん
必ずや狂狷か〈子路第十三〉うえだ あつ お
桜美林大学名誉教授／孔子学院講師 植田渥雄

「狂」という文字から受ける印象はあまり良いものではありません。それは、恐らくこの一字が常軌を逸した行動という意味を伴うからでしょう。しかし常軌を逸した行動をすべて悪と決めつけていいものかどうか、この点は一考を要する所です。では孔子はどう考えていたのでしょうか。『論語』の中には「狂」の文字が何度か出てきます。

「不得中行而与之，必也狂狷乎！(Bù dé zhōng xíng ér yǔ zhī, bì yě kuáng juàn hū!)」中行を得て之に与せざれば、必ずや狂狷か〈子路第十三〉。中庸の徳を備えた仲間を得て、そういう人達と行動を共にするのが理想であることは言うまでもありません。「中行」とは、中庸の徳を身に付けた人。一時の感情とか、個人や特定集団の利害などに左右されることなく、常に冷静な判断と行動力を備えた人のことです。しかし、そんな人が常に身近にいるとは限らない。ましてや孔子の生きた時代は混乱の時代です。そういう人が仮にいたとしても、却って生き辛かったことでしょう。

『論語』の別の所では次のようにも言っています。「中庸之为徳也，其至矣乎！民鮮久矣(Zhōng yōng zhī wéi dé yě, qí zhì yǐ hū! mín xiǎn jiǔ yǐ)」(中庸の徳為るや、其れ至れるかな。民に鮮なきこと久し)〈雍也第六〉。中庸の徳は、この上なく素晴らしいものである。しかし、そういう徳を備えた人はすでに少なくなってしまった、と。

では、どういう人たちをあてにすればいいのか、そういう時はむしろ「狂狷」な人を選んだ方がよいのではないかと孔子は教えています。狂狷とは一本気で頑固な人のことです。中庸の徳を備えた人が見当たらなければ、いい加減な妥協をする人より、むしろ一見それとは正反対の、一途で頑固な人の方が良いの

ではないか、というわけです。「必ずや狂狷か」はそういう気持ちを表わしています。

文はさらに続きます。「狂者进取，狷者有所不为也(Kuáng zhě, jìn qù, juàn zhě yǒu suǒ bù wéi yě)」(狂者は進んで取り、狷者は為さざる所有り)。狂者には自ら進んで物事に取り組む気質があり、狷者には人にそそのかされたりしない頑固さがあるからだ、と。「進んで取る」とは、傍目を気にすることなく積極的に物事に取り組むこと、「進取の精神」という言葉はここから来ています。時には失敗することもあるが、それを恐れず突き進むこと、俗な言い方をすれば、血の気が多いということです。「狷」とは「狷介不羈」という四字熟語が示すように、人の言いなりにならないことです。悪く言えば頑固で、周囲の空気が読めない。こういう人は、世間から見れば確かに扱いにくい。しかし悪に染まることもない。「為さざる所有り」はそのことを表わしています。付き合いにくいですが、安心して付き合える人、とも言えます。

晩年、長い旅を終えた孔子は、故郷を目指して、次のように語っています。「归与！归与！吾党之小子狂简，斐然成章(Guī yú! guī yú! Wú dǎng zhī xiǎo zǐ kuáng jiǎn, fěi rán chéng zhāng)」(帰らんか。帰らんか。吾党の小子は狂簡にして、斐然として章を成す)〈公冶長第五〉。さあ帰ろう。私の故郷の若者たちは血の気が多く粗削りだが、優れた資質を持つ者が、綺羅星のごとく並んで待っている、と。吾党とは孔子の自宅がある村、集落のこと。「小子」とは若者。「斐然として章を成す」とは、美しく居並ぶさまです。狂は「狂狷」の狂に同じ、「簡」は荒削りで未完成なことです。孔子は教育者として、人生最後の望みを「狂」の一字に託していたようです。

(わんりい「中国語で読む漢詩の会」講師)

8月28日に入った。長春から28日の午前0時過ぎに戻り、少々疲れたので今日はホテル周辺でゆったりと英気を養うこととした。4日間の行動を旅行記用にメモしたり、大連駅からすぐの天津街などを散策しながら久しぶりの街の顔を眺めた。

朝はゆっくり起床して9時ころホテルの向かい側にある「慶豊包子」というレストランでおかゆと包子を食べる。ホテルのレストランの朝食はバイキングでいろいろ取り揃えてあるが、朝からたくさん食べられるわけではないのでこの程度の胃に優しい食事で十分である。注文したおかゆは、「南瓜銀耳粥」といい、南瓜はカボチャで銀耳は白キクラゲである。これが結構いけるのだ。銀耳は東北地方に自生するキノコ類であるが、今は室内栽培が主力だとか。

本日で大連に来て5日目であるが、この4日間で何人もの友人と話す中で、ある話題を何度か耳にした。それは、星海広場のモニュメントについてであ

る。大連の中心部から南西の海辺に広大な「星海広場」がある。1.1km²の広さであるが、東京ドームグラウンド85個分の広さと言えば分かりやすいであろうか。隣接して「星海公園」と紛らわしい名前の公園がある。このあたりは戦前日本が統治していた時代は「星が浦」という地名で、当時大連に住んでいた日本人は東洋一と言われた星が浦の海水浴場に家族で来て楽しんだところである。

ここで「星海広場」とはどのような広場かを紹介したい。

広場の完成は、1997年6月30日である。1997年と言えばすぐ思い出されるのは、香港が中国に返還された記念となる年である。広場を造るよう指示したのは、薄熙来大連市長(当時)であった。彼は大きな広場を造るため、一時ゴミ捨て場にもなっていた星海湾を埋め立てさせた。大連市の市制100周年記念事業としての位置づけであった。出来上がった広場はアジア最大の面積を誇った。広場の中ほどに二重の楕円形の道路を造ったが、一番外周の道路で長いところは240mもの長さがある。楕円の中は芝生が敷き詰められ花々が植えられていて気持ち晴れ晴れする。そして楕円の中心には、天を突くような真っ白い「漢白玉華表」が立っている。^{ファビオ}「華表」は辞書によれば、〈古代、宮殿や陵墓の前に建てた装飾用の一対の大きな石柱〉と出ている。星海広場の華表の大きさは、高さ19.97m、柱の直径は1.997mもあり、上空から見ると星の柄に見えるそう。お分かりのように香港返還の年号に合わせて造られたのである。北京にも華表があるが、高さは9.75mであるという。造った当時こんなに大きなものを造って大丈夫なのか、と危惧する声もあったそう。

広場の周辺は、高層の高級マンションが林立していて独特な景観を醸し出している。また楕円の端から海の間、巨大な本を開いたようなコンクリートのモニュメントがあり、そばには市制100周年を記



星海広場 (GoogleEarthから。画像取得2016年6月28日。このときは「華表」は星形の中心にまだあった)



上記写真の星形中央に立っていた大連華表
(2010年撮影。GooglePanoramioから)

念した1000人の足型がはめ込まれた金属製のプロムナードが置かれている。とにかくゴミ捨て場を一大観光地にした薄熙来市長（市長在任期間1993～99年）の手腕は素晴らしい。彼は大連の人からは絶大な人気がある。彼は大連市に多くの人を呼び寄せるためあちこちに芝生を植え、植栽を増やすなど街の美化に取り組んだが、この広場もその一環であろう。また経済開発区に多くの海外企業の誘致を図り経済も活性化させるなどした。最後は権力闘争の末なのか真相はよくわからないが、逮捕され服役中である。それでも大連人は奥さんを悪く言っても彼を悪く言う人はいない。

さて大連人の多く(?)が怒ったり悲しんだりしているのは、広場の象徴であり大連の誇りと言っても過言ではない「華表」を一方的に撤去されたことである。（一方的ではないかもしれないが中国では何かを実施するとき事前説明があまりなされないののでこのように感じるのであろう）しかも毎年ここで7月下旬から8月初めの約10日間開催される「国際ビール祭り」が終わった8月5日の未明に、後片付けの最中に取り壊され撤去されたそうである。これに対する大連人の多くの見方は、薄熙来が逮捕され、2013年に無期懲役の判決を受けたことに関連する北京の意向ではないかと噂している。私は大連の人ほどではないが、あの美しい華表がもう見られないのかと思うととても寂しい。

星海広場はいろいろなイベントが行われている。まず世界各国のビールが飲めるビール祭りは青島のビール祭りと共に有名であるが、あちこちに設営された舞台上では踊りや演奏などがうるさいほどに行われ大連人のエネルギー発散の場である。また5月には「大連国際徒歩大会」が何万人の規模で開催される。この広場を出発して美しい海岸通りを歩く。途中、北九州市と大連市の姉妹都市（1979年締結）を記念して造られ、両市の頭文字をとった「北大橋（1987年竣工）」という美しい吊り橋を通り、有名な観光地である「老虎灘」を目指して歩くのだ。大連にいた時毎年参加したが、個々人の体力に応じて5キロ、10キロ、20キロ、30キロと四つの距離に分けてある。私は20キロの部に参加し、友人



大連北大橋 (GooglePanoramioから)

と話をしながらゆっくりと歩くのであるが結構体力を消耗する。しかし無事ゴールして完走の承認印をもらおうと何とも言えない達成感を感じたものだ。花火大会と言えば日本では夏の風物詩であるが、中国では夏場と相場は決まっていない。お正月に星海広場で花火大会があるというので、ホテルがチャーターしたバスに乗り込んだ。広場の海側で打ち上げられたが寒さに震えながらの見物も今となれば懐かしい思い出である。このように大きなイベントの多くは星海広場で行われており、やはり大連の象徴となる場所である。華表が撤去された後はどうなるのかを友人に聞いたところ、音楽噴水を造るとのことである。

本稿の最後に「大連金州湾国際空港」について触れたい。現在の「大連周水子空港」は、もともと1905年に当時の日本海軍が建設したのがスタートで、利用客の増加と軍用空港として共用することになったこともあり拡張工事の連続であった。それでも現在は手狭になっていて、早晚需要が捌ききれなくなるという。そこで新空港の計画が持ち上がったわけである。当初の計画より3～4年ずれ込んだが、「中国光明網」は、2018年に完成見通しと伝えているようだ。新空港は、大連市北部の金州湾上に約21km²の人工島（タテ6.54km、幅3.5km）を造成し、その上に最終的に滑走路を4本造る計画である。アクセスは、地下鉄5号線と空港専用鉄道が乗り入れることになっている。当初の計画では現在の空港は貨物専用の位置づけであったが、果たして全体像はどのようなになるのであろうか。私の家から成田空港は遠いので羽田↔大連便が開通することを願っている。

(続く)

▶ 解放以前の封建的な結婚事情

1949年に新中国が誕生しましたが、それ以前の結婚の多くは、双方の両親が本人たちの意思に関係なく決めていました。旧い中国の封建的な時代の結婚はずっとそのようなものだったのです。ここでは、中国の著名な文化人二人の例を挙げて、このような結婚事情を見てみましょう。その一人は郭沫若です。

郭沫若は日本でも中国の代表的な知識人として有名です。1892年に生まれた彼は四川省の出身、地主の家庭で生まれ伝統的な教育を受けましたが、辛亥革命の空気に触れて学生運動に積極的に関わりました。そして1912年、21歳の時、両親が決めた女性と結婚しました。しかし結婚式を挙げた5日後には家を出て、学校の寄宿舎に戻り、両親に諭されても彼女のところに戻ることはありませんでした。後年に書いた彼の自伝によれば、彼女は纏足をしていたようです。彼は翌1913年、日本に留学し九州大学医学部を卒業し、日本女性と結婚しました。

もう一人は、文豪・魯迅です。小説『狂人日記』『阿Q正伝』などを書いた魯迅は1881年生まれ、浙江省紹興の出身です。清朝末期の1902年、公費留学生として日本に渡り、1904年には仙台医学専門学校、現在の東北大学医学部に入学します。

1906年、微生物学の授業の合間に放映された幻灯の中に、中国人が日本の軍人に首を切られている写真がありました。多くの中国人が黙って取り巻いている姿を見て大きなショックを受けました。中国人たちが切られている場面を無表情に見ているのです。それを見て魯迅は、現在の中国にとっては医学よりも精神の覚醒が必要だ、人々の覚

醒には文学が必要なのだ、と医学から文学に転向しました。

その夏、魯迅は実家から、母親が病気であるから帰るようにという手紙を受け取りました。それは、母が魯迅を結婚させるために呼び戻すためでした。相手の女性は、魯迅よりも三歳上、文字も読めず、また纏足をしていた女性です。朱安というその女性とは、魯迅は生涯、夫婦として生活することはありませんでした。

そして1928年、魯迅は許広平という女性と結婚しました。許は広東省の生まれ、北京師範大学の学生時代、保守的な校長の排斥運動でリーダーとなって活動していた時代に、同大学で非常勤講師をしていた魯迅と知り合います。魯迅は学生たちを支援していました。許は、新中国になった後は、全人代常務委員などになって活躍します。

一方的に“結婚”させられた劉仁

結婚は家のためと考えられた封建的な時代です。劉仁も家に縛られ、12歳の時、親によって一方的に結婚させられました。しかし劉仁は、家からおおよそ120キロも離れた営口の水産専門学校に入学して寮に入ります。学費や生活費などは今までのように親が負担していました。嫁の楊春揮を養っていたのも劉家でした。

劉仁の家は、遼寧省本溪から南におおよそ20キロ、橋頭街というところでは、劉仁の父、劉振邦は郵便局長を務める一方、「徳元堂」という薬局を営しており、更に酒や煙草、お茶、そして後には、精米、製粉加工所を経営するなど、なかなかのやり手の実業家でした。祖父の代から受け継いだ事業を伸ばし、橋頭街では屈指の名士でもあったようです。

第十回 エスエペランティスト長谷川テルの人生④
『ある華僑の戦後日中関係史』
ジャーナリスト、方正友好交流の会事務局長、著書
大類 善啓（おおるい よしひろ）

劉振邦には、男三人、女二人の子どもがあり、劉仁は長男、弟が劉介庸、そして三男が劉維箴と言い、その三男が家業を継ぎました。次男の介庸も兄を追って日本に留学しました。その介庸が連れてきた兄・劉仁の妻・楊春揮に会ったテルの気持ちはどのようなものだったのでしょうか。

木田日登美の「〈覚え書〉長谷川テルと劉仁の恋愛と結婚」(『長谷川テル日中戦争下で反戦放送した日本女性』長谷川テル編集委員会編所収)に依れば、劉仁はかつて、弟の介庸には「楊春揮と子どものことは決してテルには話すな」と口止めしていたようです。以下の事実も木田の書かれたものに依ります。

実は30年以上も経ってから楊春揮は、劉仁が17歳の頃、楊春揮との間に事実上の関係が発生した、と語っています。

劉仁は、このような事実をできるだけテルに話さなければいけないだろうと考えていたようです。日中戦争下の中国での劉仁とテルの厳しい生活は、知人たちからも離縁した方がいいのではないかと言われたこともあったようですが劉仁はテルを愛していました。それ故にまた、かつて親が一方的に決めたとはいえ、結婚していたという事実をテルに言うことはできませんでした。

➤ 劉仁と楊春揮との12年ぶりの再会

1946年4月、劉仁は楊春揮と12年ぶりに再会します。その時、劉仁のそばには二人の小さい子どもがいます。またそこには彼女より若い女性、テルがいました。

後年、劉仁とテルの間に生まれた女の子は、その後成長していろいろな経緯を経て、日本で長谷川暁子として日中友好活動に携わりますが、彼女の記憶に依れば、楊春揮は暁子のオムツを代えたりして、よく面倒を見てくれたようです。

この時、楊春揮は劉仁とテルの所に3日間泊まったようです。木田は、2006年4月本溪で、劉仁の姪・劉艶月に、楊春揮が劉仁とテルに会った時、

彼女はテルに「私のことは心配しなくていい、大丈夫、あんたは佳木斯(ジャムス)に行きなさい」と言って一人で橋頭に帰って行ったと話しています。

楊春揮もやるせない気持ちだったでしょう。テルもまた辛かったでしょう。二人の女性を前にした劉仁の心はどのようなものだったのでしょうか。

1946年11月、劉仁とテルは再び、佳木斯に向かいました。東北人民政府副主席となった高崇民の夫人と二人の子ども、劉仁とテル、そして二人の子ども、劉星と劉曉嵐(後に長谷川暁子と改名)、そして劉仁の弟・介庸です。すでに東北地方(旧満洲)は国共内戦を経て、中国共産党の支配地区になっておりました。

1947年1月7日、東北行政委員会第13回会議は「緑川英子と劉仁を東北社会調査研究所研究員とする」と決定しました。緑川英子とはテルの中国名です。この頃、テルのお腹には3人目の子どもが宿っていましたが、テルは流産する道を選びました。しかし流産の手術は失敗でした。当時の不衛生な手術器具から感染症になり、テルは亡くなりました。なぜ流産の道を選んだのか。劉仁が結婚していたことを知って劉仁を嫌いになったからではないか、と推測する人もいますようです。しかし、テルの健康問題が大きかったのではないか、というのが多くの研究者たちの結論のようです。

住んでいた重慶の気候の悪さ、また重慶には栄養不足から結核に感染する人々が非常に多かったようです。ともあれ、テルは34歳の若さで亡くなったのです。後を追うように、3か月後、身体が悪かった劉仁も黄泉の国に旅立ちました。

長谷川テルは、中国での筆名、緑川英子という名前、Verda Majo(ヴェルダ・マーヨ、緑の五月)というエスペラント名という3つの名前をもって平和のために闘い、今、劉仁とともに佳木斯の烈士陵园に「国際主義戦士」としてに葬られています。

(続く)

東西文明の比較 (12)

陽光新聞社・顧問

塩澤宏宣

「1万年以上続いた平和な日本列島へ、大陸から大量の渡来人が流入し、縄文人を蹴散らして弥生文化を築いた」。私たちは歴史の授業で、このように教わりました。今でも一部の学校では、そのように教えているそうです。

縄文時代から弥生時代へ

縄文文化は、エジプト・メソポタミア・インダス・黄河文明に次いで「世界の五大文明」としてもいいのではないかと思います。事実、そうした説を述べている学者もいるようです。平等な社会を1万年以上続いた縄文時代について、日本人はもっと自慢をし

ていいのではないのでしょうか。本稿から「弥生」について書こうと思います。

弥生時代の始まり

最初の弥生土器が発見された場所が、現在の東大本郷キャンパス付近（東京府本郷区向ヶ丘弥生町）だったことから「弥生」の名がついたことはご存じだと思います。

弥生時代の始まりは、紀元前800年ごろといわれます。弥生時代「早期（紀元前1000年）」を設けて縄文時代晩期と重複するという説もあります。（時代区分＝後記）いずれにしても時代区分は、「本のページをめくる」ように一挙に変わるわけではありません。弥生時代は土器の形式によって、前期・中期・後期に区分されます。弥生社会は、その区分によって独自の異なる姿を見せます。

弥生前期は、めだった発展（変化）が見られません。人口200～400人程度の農村が平和裏に暮らしていたようです。土器は「無文土器」という朝鮮半島の土器に似た「弥生土器」が広まります。ところが中期になると一変します。江南から銅鏡や銅剣、銅矛などの青銅製の祭祀が流入してきました。農機具などを造る鉄

器も運ばれてきました。そして銅鏡などを用いて祭祀を行う首長が納める小国が、各地に出現します。

弥生時代後期は、邪馬台国の女王、卑弥呼の時代です。この時代には、邪馬台国のような小国が各地に興り、それらが連合して、やがて日本統一に繋がっていくのですが。

弥生文化とは

稲作に加えて青銅器と鉄器の発達に特徴付けられます。

まず、イネの日本への伝播から進めたいと思います。従来の説では、稲は中国華北から朝鮮半島北部、南部を経由して北九州へ伝わったとされてきましたが、これは間違いだと思います。最近の中国の稲（ジャポニカ種）の遺伝子研究では、日本で普及したジャポニカ種は「長江下流付近から直接、北九州へ伝播した」という説が強くなりました。その時期は紀元前3世紀頃と言われます。

水田を作って稲を育てる「水稻耕作」は、日本に重大な変化をもたらしました。土地の占有による貧富の差、集団における指導層の誕生などです。

水稻耕作は、朝鮮半島南部から伝わったと考えられています。江南の水稻耕作が朝鮮半島の中部を経て南部に広まったのは紀元前1100～1000年頃。そしてその技術はいち早く日本に伝えられました。

近年、水耕稲作は縄文時代には、すでに存在していたことが判明。福岡市板付遺跡や唐津市菜畑遺跡、大阪府茨木市牟礼遺跡などから縄文晩期の土器などと一緒に水田跡が発掘されています。このことから、朝鮮半島南部の人々との交易を通じて水耕稲作の技術を得た縄文人の一部が、狩猟・採集をしながら、その合間に水耕稲作を行っていたと考えられます。

次に青銅器と鉄器がほぼ同時に伝わる

西欧から中近東の歴史では、まず青銅器が発達し、鉄器については大分遅れて発達したと記されています。ところが日本では、それらがほぼ同時期に導入されました。その理由は楽浪郡との交易にあります。楽浪郡とは、前漢朝（紀元前202～後8年）の植民地です。

弥生時代に朝鮮半島から伝わった稲作用の石器や木器、耕作用の鋤や鍬、粃の脱穀用の木臼や竪杵、沼

地で使う田下駄や田舟も、その源流は中国です。水耕稲作とともに機織りの技術も入ってきました。弥生人は紡錘車で糸を紡ぎ、機織りして布を作っていました。

弥生文化は、中期(紀元前40年頃)に入り急速に豊かになりました。江南(揚子江下流域)との直接交流が始まったからです。この時代、九州北部を中心に有力な墳墓が広がり始めました。それらは小国の王墓と見られています。最古の王墓は、福岡市吉武高木遺跡。木棺墓を囲むように配列された百五十基の甕棺墓(大型の土器に遺体を収めた墓)が出土しました。木棺墓から前漢の銅鏡・銅剣・ヒスイ製勾玉が出土しました。更に木棺のそばから銅矛・銅戈・管玉百個が見つかっています。

前漢の歴史を記す「漢書」地理志という班固の手になる中国の正史に次の一文があります。

「楽浪郡の付近の海の中に、倭人が住んでいる。かれらは百余りの国に分かれている。そしてしばしば交易を求めてやってくる」と。

徐福伝説の謎…彼は日本に何を伝えたのか

ここで新説を述べてみたいと思います。この「説」は、私が以前、何かで読んだ本にヒントを得たものです。その後、ウィキペディアなどをつまみ食いしたモノですから、“珍説”と言った方が正しいかもしれません。

みなさん、「徐福」をご存じですね。秦の始皇帝から不老不死の薬を探すよう命じられて、日本へ来たとされる人物です。時期も稲の日本へ伝播した頃と一致します。この伝説は有名な司馬遷が著わした「史記」にありますから、その可能性は十分考えられると思います。

日本各地に徐福を祀る神社や伝説地があります。北は青森県から南は鹿児島県まで分布しています。それぞれの伝説地には、「焼き物技術を伝えた神」として徐福神社(三重県熊野市波田須)、「捕鯨の技術を伝えた神」として須賀神社(和歌山県新宮市)、「織物をもたらした神」として太神社(山梨県富士吉田市)などが有名です。

史記の「秦始皇帝本紀(紀元前219年)」に興味深い記述があります。

「斉の人、徐福等書を奉りていう、海中に三神山あり。名付けて蓬萊、方丈、瀛州^{えいしゅう}という。僊人^{せんじん}これに居る。請う、斉戒して、童の男女とともにこれを求むるを得ん。徐福を遣わして童の男女数千人を発し、海に入りて僊人を求めしむ」

また、史記の「淮南衡山列伝」に次の記述があります。

「皇帝おおいによろこび、童の男女三千人を遣わし、これに「五穀の種」と「百工」をおくりて行かしむ。徐福、平原広沢を得て、止まりて王となりて来たらざりき」

先の徐福伝説と史記の記述を重ね合わせると従来の教科書で教えられた「弥生時代」が姿を変えてしまいます。なお、最近の中国における徐福研究によると、徐福の出身地が、ジャポニカ米の誕生地である長江流域に近い江蘇省であることが分かりました。ここから東へ行けば北九州に到達します。おそらく、このあたりには古くから、そうした言い伝えがあったのではないのでしょうか。

この伝説を“正当化”するもうひとつの理由があります。男女三千人が中国には戻らなかったという記述が史記にあります。日本に定住して、やがて縄文人とも共同生活を始めたのでしょうか。その証拠が西日本の人口が急増したことです。縄文晩期から弥生前期の人口は、およそ26万人といわれ、そのほとんどが東日本に住み、西日本にはわずかに1万人しか住んでいなかったといわれていました。それが、急激に人口が増加したことは、徐福が連れてきた「三千人の童」と大いに関係があると思います。縄文人との混血、「弥生人」が誕生したと考えても良いのではないのでしょうか。そして、始皇帝から遣わされた「百工」からは中国の新技術がもたらされました。また、「五穀」のなかには当然稲も含まれていたでしょう。

注)弥生時代について：4つの説があります。

1. 縄文時代晩期(紀元前1000年ごろ)に弥生時代早期が重複する。
2. 縄文時代晩期が紀元前800年頃終了し、弥生時代前期が始まる。
3. 縄文時代晩期が紀元前700年ごろ終わり、弥生時代早期が始まり、紀元前300年頃弥生時代前期が始まる。
4. 縄文時代晩期は紀元前300年まで続き、弥生時代前期が始まる。

ポロンナルワは、アヌラーダブラ¹⁾に続いて10世紀から12世紀までの間、スリランカの首都であった。アヌラーダブラもポロンナルワ²⁾も基本的には、同じような運命を辿っている。後者の灌漑設備は他の文明都市に比べて非常に進んでいた。又、ポロンナルワを統治した王は、仏教の普及に力を注ぎ、仏教都市として開発した。僧院が多く建立されるに従って、タイやビルマの仏教僧が都に訪れるようになった。仏教の普及に力を注ぎ、ポロンナルワを仏教都市として開発した。僧院が多く建立されるに従って、タイやビルマの仏教僧が都に訪れるようになった。再々、南インドのタミル人から侵略を受け、その後、ポロンナルワは廃墟と化した。ジャングルに埋もれていたのを、19世紀になって発見された。遺跡の発掘が始まり、最盛期の栄華を伝えるアジア有数の大遺跡群を観ることが出来、その昔の王朝史を物語っている。南北5kmの広域にわたる寺院・仏塔・宮殿等々、すばらしい仏教芸術のステージが点在する。世界各地から訪れる観光客は、その広大さに魅了されるという。

宮殿跡を歩いてみる

タミル人の襲撃・侵攻・奪還を繰り返したシンハラ王朝は、1017年に遷都を敢行した。北中部州東に位置するポロンナルワは、ドライゾーンで、前王朝時代から貯水事業が進み、生活の基盤となって豊かな暮らしが出来た。中でもパラークラマ・バーフ1世³⁾の時は繁栄を極め、その宮殿跡を歩いてみることは興味



ポロンナルワの宮殿跡 (「グーグルPanoramioより」)

津々であった。ガイドブックを読んで「百聞一見にしかず」と、10月の灼熱の太陽を浴びながら歩いた。スリランカの人々は、遺跡観光というよりも、信仰の場巡りをしているような印象を受けた。遺跡地入口から東へ突き当たると、右側にパラークラマ・バーフ1世の宮殿跡へ入り口がある。西側に位置する重厚なレンガ造り建築がある。この宮殿の高さは、その建築当時35mもある7階建てであったという。レンガ造りの厚さは3m位であろうか。ホールの屋根を支えていたのは36本の柱であったとも。区切られた部屋は50室で、その中に300人の女性が暮らしていた。日本では、さしずめ大奥であろうか。王妃や側室も同居するその環境は世界共通のようで、慣習のようになってしまえば、ごく普通に受け入れるものなのだと思える。壁に今も残っている開口部には、木造の床を支える柱がはめこまれていたのであろうか。床は階が上につれて狭くなり、ピラミット型の構造であった？レンガ造りの壁は、3階までしか残っていないのは、木造部分が朽ちてしまったのかと想像してみた。2階に続く石段は、一つしか残っていないが、しっかりとしていた。20年余前の人の姿はサリーやサロンスタイルであったのに、周りを見るとフレヤースカートやジーンズ姿の男性もいる。時代の変化を感じる。

建物の裏側を通っている水道管らしいものは汚水溜に連なっていた。異臭悪臭が遠のけられる工夫がされている。ということは、かなり高度な建築技術であったことが窺える。古の時代から、このような建築事業を推進出来たことは、パラークラマ・バーフ王の大功績である。国は王をリーダーとしてその力に判断力や理解力が加わることで発展する。また、王の権力はその統治力によって維持されるともいえよう。

閣議場・沐浴場・・・象やライオンなどの彫刻と幾何学的デザインが精巧に刻み込まれ、どの動物たちも人間も生きている如く躍動感がある。世界遺産のピーアルポイント「磨崖仏寺院、ガル・ヴィハーラ」は、王の遺功を讃えているかのようで、今日でも参観



ガル・ヴィハーラの涅槃仏
(「グーグルPanoramioより」)

者が絶えない。聖と俗、清濁を合わせ呑む偉大な器こそ、何よりも王の条件だと思えてきた。

まがい 磨崖仏を観る

ポロンナルワの最盛期は海外貿易も盛んで、ヒンドゥ文化の影響も随所に見られる。スリランカ最大の磨崖仏寺院、ガル・ヴィハーラもその一つで。石造りの座像・立像・涅槃像が並んでいる。仏陀が理想を経て悟りを開き、涅槃に入る流れを表わしている。3体の仏像の前に立っていると、迫力があるというよりも、なだらかな姿態や表情から安寧を感じさせる。向かって左の方の仏像は、瞑想する様子で精神を集中しているようだ。印象深かったのは、その向かって右足の上方にみた炎に包まれたライオンである。「どんな強い人でも死んでいくという例えを、ライオンにみる」とガイドが説明された。その横に、僧院窟に入った仏の座像があったが、この坐像はヒンドゥ教の神に囲まれていた。ヒンドゥ神が仏教を守っているように思える。仏陀立像は腕を組んだ高さ7m位あるようだ。珍しい姿勢であるけれど、瞑想中に菩提樹が影をつくってくれたのでその陰の中で祈ったという説がある。いずれにしても悟りを得たお姿らしい。ご一緒下さったタランガッレ・ソーマシリ師は、「ブッダの弟子・アーナンダが悲しみにくれている立像だという説もあるよ」と云われ、私も仏陀の死を悼む弟子の気持が美しく彫られているように感じた。その隣が涅槃仏である。ふくよかで優しい表情をしている。15米ほどあるだろうか。涅槃仏であることの証拠に左右の足が揃って

いない。これらの座像・立像・横状像は後方にある岩山を刻んで造り上げた石造群である。暑さを忘れてその気高さを拝していた。

パラークラマ・バーフ1世は、サンガ⁴⁾の浄化にとどまらず、上座部仏教の再布教にも取り組んでいる。自国の仏僧に対するビルマ側の扱いに抗議するために伝道師を派遣した。1181年には、ビルマに送られた僧侶がシンハラ・サンガを創設している。そのビルマから13世紀にはタイにも伝わっている。

仏教興隆の背景にはこうした強い決断力と実行力が常に起爆力となっている。他面・権力と仏教の関わりを考えると、王が国民をまとめるに当たって、仏教の戒律による統治方法が民衆の心をより一層深く掴む力になったのではないだろうか。王の信仰心の厚さが仏塔や寺院・磨崖仏などを建造すると共に民衆の心を掴んで離さないものとしたに相違ない。

■注

- 1) アヌラーダブラ：スリランカ北中部州にある古都である。北中部州の州都であり、アヌラーダブラ県の県都でもある。1982年、ユネスコの世界遺産に登録された。
- 2) ポロンナルワ：スリランカ北中部州にある中世の古都。1017～1255年までスリランカの首都であった。
- 3) パラークラマ・バーフ1世：シンハラ王朝の首都構築に大きく貢献した。その治世の間、ポロンナルワは交易と農業が栄え黄金時代を迎える。
(上記注はいずれももウィキペディアから抜粋)
- 4) サンガ：仏教の出家修行者及びその集団のこと。シンハラ・サンガはスリランカ僧の教団を指している。

【‘わんりい’の原稿を募集しています】

‘わんりい’は、2月と8月を除く毎月発行の当会の会報です。主として、会員と会の関係者の皆さんの原稿でまとめられています。海外旅行で体験された楽しい話、アジア各地の情報やアジア各地で見聞した面白い話などを気軽にお寄せ下さい。又‘わんりい’の活動についてのご希望やご意見及び‘わんりい’に掲載の記事などについても、簡単にご感想をお寄せいただければと存じます。

日中文化交流市民サークル ‘わんりい’

「登金陵凤凰台」

報告：花岡風子

1月のお題は李白の『登金陵凤凰台』（金陵の鳳凰台に登る）という作品でした。「金陵」とは今の南京のことです。

南京は歴史の古い都で、三国志の呉の孫権が建業と称してここを都とした後、400年の間に東晋、宋、斉、梁、陳、と六つの王朝の都となりました。3世紀から6世紀にかけての六朝時代、この都を舞台に文化が華やかに開花したのでした。

四川省出身の李白は、25歳の時、725年秋から726年の春にかけてここに滞在し、『金陵酒肆留別』（金陵の酒肆にて留別す）という詩を残していますが、その後、唐の長安に向かいました。長安時代は玄宗皇帝の下で宮廷詩人として活躍したものの、奔放な振る舞いが祟って後に側近達に疎まれ、都を追われます。この詩は長安を追われた李白が流浪の旅の途中に再び金陵の地を訪れたときの作品とされています。

この作品は律詩の形式で、伝説故事、歴代王朝の歴史、金陵の当時の風景、そして李白の人生、と四つの場面（8句4聯）で構成されています。

全体の意味は、

「鳳凰台にはかつて鳳凰（伝説の瑞鳥）が舞い降りて遊んだと伝えられるが、鳳凰は既に飛び去って、今は空しく長江が流れている。

孫権が治めた呉の都の華やかさは跡形もなく、東晋の都で活躍した官僚たちも既に土となった。

ふと見上げると、三つの山がまるで青空にぶら下がっているかのようだ。視線を下げると長江の流れはふた手に分かれ、白鷺洲（金陵の町並みを指す）を囲むように流れている。

雲が太陽を覆い隠して長安の都が見えないのはなんと切ない」

植田先生曰く「最後の二句、第4聯は李白の恨み節だね。この浮雲とは李白を追いやった意地悪な側近たちのことを指していますね。物理的に長安の都が見えないことのほか、心理的にも長安が遠ざかったことを暗示していると思われます」。「总为浮云能蔽日」（総て浮雲の能く日を蔽うが為に）という表現は『古詩十九首』という中国最古の五言詩集の第一首『行

登金陵凤凰台

作者：李白

fèng huáng tái shàng fèng huáng yóu fēng qù tái kōng jiāng zì liú
鳳凰台上鳳凰游，風去台空江自流。

wú gōng huā cǎo mái yōu jīng jìn dài yī guān chéng gǔ qiū
吳宮花草埋幽徑，晉代衣冠成古丘。

sān shān bàn luò qīng tiān wài èr shuǐ zhōng fēn bái lù zhōu
三山半落青天外，二水中分白鷺洲。

zǒng wéi fú yún néng bì rì cháng ān bù jiàn shǐ rén chóu
总为浮云能蔽日，长安不见使人愁。

行重行行』の中に出てくる有名な一句「浮雲蔽白日，遊子不顧返」（浮雲白日を蔽い、遊子顧返せず）を典故として用いています。

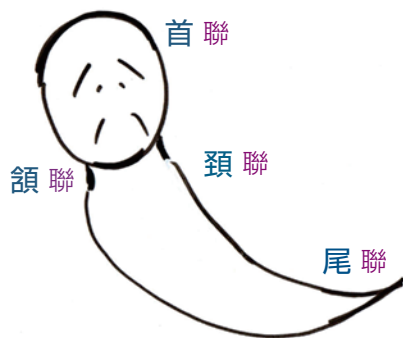
「最後の二句に李白の性格が非常によくあらわれているね。李白というのは人付き合いを疎ましがる人間嫌いな所があって、仙人に憧れる一面もありましたね。そのくせ寂しがり屋で、人がいないのもまたイヤだという面もある。非常にカワイイ性格だね。杜甫とはまるで違うね」とニコニコしながら植田先生。「人嫌い」で「寂しがり屋」と言う二面性のある厄介な性格も植田先生にかかっては可愛いと映るようです（笑）。

ところで、前回ちよいワルオヤジ崔顥の「黄鶴楼」の詩の紹介を読んでもくださった方は

今回の作品、どことなく似ていると思われませんか？
実はこの二つの詩はとても似かよっているのです。

1. 伝説引用から入り、風景を読んでから作者の心情を語ると言う点
2. 対句も何処となく似ている
3. 四聯目の人をして憂えしむというのはまるきり同じ文句

これについては色々なエピソードがあります。その一つは、「李白が黄鶴楼を訪れ、正に詩を詠まんとしたところ、壁に落書きのように崔顥の『黄鶴楼』が書き付けてあった。それを見た李白はその出来映えの良さに「マイッタ！」とばかりに筆を折って去り、のちに鳳凰台に行って同じ様な詩を作った」とか。崔顥という詩人の経歴や素性がハッキリしないので、本当のことかどうかは分かりません。李白という詩人は典故



やパクリ？の名人的なところもあるので、この詩もそうだろうと思われたのか、真相は謎ですが、李白が筆を折って立ち去ったことは『唐才子

伝』という、唐代の詩人や文人のエピソードを集めた書物に載っているそうです。

ところで話が横道にそれますが、この『唐才子伝』、実は中国では書物の一部しか残っていなかったのがなんと日本に全て残っている¹⁾とのことです。実は、中国ですでに失われた文物が日本で保存されていたという例は他にも多数有り、かの有名な『金瓶梅』の完全版も、何と日光のあるお寺で見つかった²⁾そうです！「お坊さんがコッソリ読んでたのかねえ」という植田先生のコメントに一同大爆笑。私の頭にも、布団をかぶって金瓶梅を隠れ読むお坊さんの姿がしかと焼きついてしまいました(笑)。

正倉院の宝物にも中国ですでに失われてしまっているものが多々あります。「日本は中国文化の冷凍庫ですな」と言う先生のお言葉に一同から笑いと納得の吐息が漏れました。

‘わりい’がこれまで関わってきた中国民族音楽演奏者の中には、探し求めていた中国古代の伝統楽器に日本で出会い、復元して演奏している方々が結構いらっしゃるということです。日中の文化は悠久の歴史の中でお互いに絡み合ってきたといえます。

例えば、季節を文学の主題にするのは漢詩の影響と

言えます。万葉集には季節を詠んだ歌は極めて少ないと言われていますが、古今和歌集になると季節がテーマになっているものが多くあります。雅楽もしかり。儒教、仏教のほか、風水、陰陽等、道教の影響も日本文化の中にしっかり根付いています。

「だから日本と中国は仲良くしなくちゃいけない。ケンカしちゃうんだよね」という先生のお言葉に大きく頷いた私でした。

最後に植田先生がヘンな幽霊の絵を黒板に書いて下さいました。これは何かというと律詩を構成する聯の名を覚える為の絵なのです。

第一聯は首聯⇒1, 2句目。「首」とは頭のてっぺんを指す。だからトップの意味にも。

第二聯は額聯⇒3, 4句目。「額」はあごの骨を指す。

第三聯は頸聯⇒5, 6句目。「頸」は首すじの意味。

第四聯は尾聯⇒7, 8句目。体がなくていきなり尻尾。

「なんだかゲゲゲの鬼太郎に出てくるオバケみたいでしょう。律詩の形式は、この体も手足もないオバケの絵を思い浮かべれば、たとえ度忘れしても一発で思い出せますね」とのことです。植田先生の楽しい漢詩講義にとうとうオバケの絵まで飛び出しました。仰る通りというわけで今回もあっという間の一時間半を堪能しました。

■注

1)『唐才子伝』：元代の西域人、^{しんぶんぼう}辛文房撰。室町時代の五山本を元に、江戸時代に復刻された版本が中国に逆輸入され、完本として定着した。

2)『金瓶梅』：日光・^{りんとう}輪王寺慈眼堂蔵本。徳川家康、秀忠、家光を支えた^{じげん}天海僧正の蔵書。『金瓶梅』詞話。

「漢詩の会」たより⑨

(2017年2月19日)

「过故人庄」

報告：花岡風子

今日のお題は孟浩然の『过故人庄』(故人の荘に^{よぎ}過る)という詩です。

孟浩然と言えば『春晓』、春晓^{しゅんぎやう}といえば「春眠晓を覚えず」ですね。このワンフレーズで歴史に名を刻んだと言っても過言ではありません。小学五年生の息子の国語の教科書にも漢詩の紹介としてこの詩だけが載っています。日中両国民で知らない人はいません。

それほど有名な詩人ですが、一体どんな人生を送った人物なのでしょう。

孟浩然是689年生まれ、740年没、同じ時代の王維より10年、李白より12年、杜甫よりは23年早く生まれています。盛唐の時代を築いた玄宗皇帝の即位した712年、孟浩然是既に23歳でした。一度は玄宗皇帝に仕えようと、友人を介して詩を送るも

过故人庄

作者：孟浩然

故人具鸡黍，邀我至田家。

绿树村边合，青山郭外斜。

开轩面场圃，把酒话桑麻。

待到重阳日，还来就菊花。

の、玄宗皇帝に受け入れられず、一生を隠遁生活で終えた田園詩人です。科挙に受からなかったため、官途に就くことができず、その点では不本意な生涯であったかもしれませんが、唐王朝の全盛期を生き、混乱期を迎える前、740年に世を去りました。その意味では李白や杜甫と違って、幸せな人生を過ごした詩人と言えるかもしれません。田園の自然をのびのびと詠んだ作品が多いのも、恐らくそのためでしょう。王維とは自然派詩人として並び称されました。

李白とも交友を持ちました。李白が故郷の四川から上京する途中、孟浩然と出会い、仙人に憧れを抱く二人は意気投合したそうです。李白の詠んだ『黄鹤楼送孟浩然之广陵』（黄鹤楼にて孟浩然の広陵に之くを送る）は、黄鹤楼の名と共に、二人の交友ぶりを示す作品として大変有名です。

さて、『春晓』の詩からも何となくノンビリした性格と暮らしぶりが伝わって来ますね。

『过故人庄』では、長年付き合いのある農家の友人宅に招かれ、酒を酌み交わし世間話を楽しむ。そのスローライフぶりが映像の様に浮かぶ作品です。

意味を見てみましょう。

旧友が鶏と黍でご馳走を用意して
自分を百姓家に招いてくれた。
その村の外れには森が広がり
遙か彼方にはなだらかな稜線を描く
山々が見える
通された小さな部屋からは
田園風景が広がっている
酒を飲みながら、世間話をする
今度は重陽の節句に
再び来て、菊酒を頂くとしよう

「黍」とは、米、麦、高粱、豆と並ぶ五穀の一つで、当時の庶民にとって一般的な穀物の代表でした。いわゆる主食を指します。「郭」は村と同じ。「郭外」で村の外、という意味になります。「軒」とはよく中華料理屋さんの店名に××軒というのがありますが、ここでは庶民のささやかな住まいという意味です。「桑麻」とは、桑と麻のこと。桑や麻がどれだけ取れて幾らで売れたとかいう、たわいもない世間話を指します。役人や文人たちの利害とは無関係の、庶民の話題という意味です。文人が庶民と交友することを「桑麻の交わり」というそうですね。利害や立場を超えた人間同士の付き合いということです。出典は陶淵明の『归园田居』其二（『園田の居に帰る』その二）にあるそうです。田園詩の元祖と言えば陶淵明の名が思い浮かびますが、この詩からもその影響がなんとなく感じられます。

この作品では、たわいもない庶民の世間話が、辺りの景色にじっくり溶け込み、得も言われぬ太平の世の雰囲気醸し出していますね。

重陽の節句は菊の節句とも言われ、魔除けの意味も込めて酒に菊の花を浮かべて飲む風習があるそうです。菊の花は栄養価も高いそうです。このことから思い出すのは、やはり陶淵明の「菊を採る東籬の下、悠然として南山を見る」く『饮酒』其五（『飲酒』その五）の一句です。

陶淵明が庭先で菊を摘んでいたのは、キク酒を飲むためだったんですね。私もこの話を聞いて、是非、庭にキクを植え、重陽の節句には、お酒に浮かべてみよう！と思いました（笑）。

■参考：『飲酒』其五

結廬在人境	廬を結んで人境に在り
而無車馬喧	而も車馬の喧しき無し
問君何能爾	君に問う何ぞ能く爾るやと
心遠地自偏	心遠ければ地自ずから偏なり
採菊東籬下	菊を採る東籬の下
悠然見南山	悠然として南山を見る
山氣日夕佳	山氣 日夕に佳く
飛鳥相與還	飛鳥 相與に還る
此中有真意	此の中に真意有り
欲辨已忘言	辨ぜんと欲して已に言を忘る

中国で一番美しい村・^{タンバ}丹巴訪問の旅 (写真による旅日記) ①

2016年2月5日～13日(参加8名)

2016年11月号で、呼びかけた「大川健三さんの案内で行く丹巴の旅」に行ってきました。春節の丹巴の村は、まだ緑は萌していませんでしたが日中は思ったよりも暖かく、山の斜面のあちこちに、へばりつくように建てられた村人の建物が春の陽射しの中で輝き、どこを切り取ってもまるで絵はがきの中の風景のようでした。春節で着飾った村人たちの表情は明るく優しげで、目と目が合うとにっこり微笑んで歓迎の挨拶をして貰っているようでした。

■2月6日(月) 成都 晴

2016年2月6日未明、成都双流国際空港着。元・陽光新聞社の副編集長・三好隆盛(劉怡祥)さんが手配下さった成都安怡国際旅行社送迎車が待っていた。大川健三さんは仕事でこの日の夕方であれば成都に来れないので、この送迎車に乗ってすでに予約下さってある「漢庭酒店」に向かう。ゆっくり休んで、取材で青城山に向かった1名



成都のレストラン「柴門飯兒」で一行と陳さん(左から3人目)と会食。写真左端が陳さんの母親、王玲さん。

を除く7名が11:00ホテルロビーで集合し、成都での半日を楽しんだ。

和光大学留学生だった陳佳さん(現在は結婚されて丘田佳さん)が、恵佳ちゃん、舞依ちゃんを連れて、春節の成都に里帰り中だった。お母さんの王玲さんが、成都中心街である春熙路の四川料理レストラン「柴門飯兒」で典型的な四川料理をご馳走下さった。辛くて痺れる味に成都に来了ことを実感。

その後、レストラン近くの「大慈寺」を一緒に見学。目下、改修中だったが、この寺は3、4世紀頃に創建され、三蔵玄奘が受戒したほか、鎌倉の建長寺を開山した蘭溪道隆

もここで出家したそうだ。

王玲さんは私たち全員の地下鉄のチケットも購入下さって、成都の地下鉄改札口まで送って下さった。一同、大いに恐縮しながら別れ、地下鉄初体験をしながら、成都最大の道教の寺・青羊宮へ向かう。青羊宮の名は、老子が青い羊に乗ってここで教えを説いたことによるそうだ。境内の中の建物の一つ、三清殿の前には左右に羊が鎮座していて無病息災の力があるといわれ、てかてかに黒光りしていた。左側の羊は、十二支の動物の特徴を持ち、鼠の耳、牛の鼻、虎の爪、兎の背、龍の角、蛇の尾、馬の口、羊のひげ、猿の首、鶏の眼、犬の腹、猪の尻を持って十二支の特徴を寄せ集めたとある。

夕方、ホテルに戻ると、大川健三さんは既にみえており、ホテル近くのレストランで再会を祝った。

■2月7日(火) 成都からバスで丹巴に向かう

成都7:00発の丹巴行きバスに乗車。道路は高速道路から2008年の四川大地震後に新たに建設された新道を走っているようで、道幅も広く揺れも少なく快適。ただ、九寨溝方面に向かう岷江添いの道から汶川県秀映で分かれて丹巴方面に向かう谷添いの道路に入ると、道路に迫る山の斜面は削れて大きな石が道路脇まで累々と転がり落ちていて地震のエネルギーのすさまじさを感じた。新道は、山をぶち抜いてトンネルを作っているようで長いトンネルを何度も通過。標高4000mを超える^{パーラシャン}巴朗山峠も、かつては峠の上を走ったが今は、峠の下の長い長いトン



三清殿正面入口の左右に置かれた羊





民宿「阿妹蔵家客站」



宿のオーナー更登格西さんと息子夫婦
ゲデンゲシー

■2月8日(水) 丹巴の村で

チャーターした車に分乗し丹巴県巴底郷^{ちよんさん}邛山村の巴底官寨跡を見学。

大川さんの説明によると、「13世紀にモンゴル軍が攻め込んだ時、モンゴルの將軍の1人とギャロンの金川地方の大領主の妹が結婚。領地を分譲し成立した公国の領主の館跡といわれているが、領主編纂による記録では、領主はシャンシュン^注方面からやって来た王子とされている。館跡に有った9層の石積みの塔はチベット古代建築に共通し、隨書の女国や唐書の東女国に同じ造りの「女王の館」が記録されている」とのことだ。

また、この官寨の入り口には大きなマニ車を設置した廟があり、壁に女神の姿が描かれてある。

「ギャロンで『ムルウィ』と呼ぶ土地神で、右手に生命を奪う矢を、左手に宝鏡を持ち、ヤクに乗る。これと対になる女神が近くのボン教の寺に有り、この方は、右手に宝鏡を、左手に生命を与える薬の瓶を持ち、ヤクに乗る。シャンシュン由来の女神で、本来は、生命を司る湖の女王で、右手に生命を奪う矢を、左手に生命を与える薬の瓶を持ってヤクに乗るが、何故か当地では異なる姿で描かれている。チベット仏教が盛んになるにしたがってこの女神は廃れ、ボン教が強く残る地域でだけ土地神として細々と伝承されている」



土地の女神「ムルウィ」の壁画。ヤクに乗っている

ネルの中を走った。トンネルを抜けると四姑娘山の登山基地・日隆で、以前より大きな建物が増えたようだ。2:00過ぎ丹巴着。

丹巴の町も観光ブームか、街の裏側を流れる大渡川の向側にもホテルらしき立派な建物が沢山建って町自体がかなり大きくなっていった。

丹巴の町で遅い昼食をとり、チャーターした車2台に乗り換えて、丹巴甲居村の民宿「阿妹蔵家客站」に向かう。深く切れ込んだ谷に添って山を上るにつれ、車窓から、溜息が出るような美しい村々が見えるようになる。途中、道路からテラス状に張り出した展望台で、民族

衣装の女性たちが結婚式の披露パーティを開催していたので車を止めてしばらく鑑賞する。

民宿は老夫婦が経営とのことだが、切り盛りするのは息子夫婦だ。夕食には心づくしのこの地方の料理がテーブル狭しと並んだ。手作りの腸詰がなかなかの美味だ。



夕餉の郷土料理、辛い



上下写真とも巴底土司官寨跡

村の若者たちが村に戻って来る春節は、丹巴の結婚シーズンだそうで、巴底官寨跡を見学して外へでると、丁度、近くで結婚式の披露宴を開催していた。大川さんがなにがしかのお祝いを包み、私たちも参加して、披露宴のご招待に預かった。

披露宴終了後、再び車に分乗して、山を下り丹巴県中路郷^{ちようろう}へ古石碉楼を見学に向かう。

丹巴は碉楼と呼ばれる塔で知られており、大川さんの話によると「現地では、古碉と呼ばれ、2000年代に入ってから幾つかの塔が年代測定され、測定された範囲では数百年～千数百年前に建てられている。約2000年前に



写真左：結婚式の招待に預かった面々。左端大川健三さん、右端は大川さんの甥（奥さんのお姉さんの息子）の巴華さん。大学観光科在中、将来は行政の観光に関わる仕事を希望。今回の旅では大変世話になった。写真右：披露宴のクライマックス。花嫁・花婿と両脇の付き添いの若者は、来客から祝福のハダが次々に掛けられる。



見上げる碉楼

ギャロンチベット族の祖先がシャンシュンから移民した時に通った東チベットに同じような塔が残っていて、年代測定した塔の中には1800年位前に建てられた塔がある」とのことだ。

碉楼を上ってみた。木組みに石を組み込んで建てられ、層と層は、太めの丸太に深い切り込みを入れただけの柱状の階段で繋がれている。窓も各層にはなく、中は何もなくて薄暗い。10層以上はあったようで上っても上ってもという感じだった。塔の最上部は、6畳ほどの屋上で、四隅に三角の牙のような魔除けが立てられていた。村の建物が足下にみえ眺望絶佳である。



写真提供：越後雅子、河本義宣、為我井輝忠、早坂優子、
文：田井光枝、文中説明：大川健三

注）紀元前～643年。西チベットのカイラス山麓一帯に存在した王国
(ウィキペディア)

◇わんりいの催し

中国語で読む・漢詩の会

▲3月の講座：3月20日(日) 10:00～11:30
会場：まちだ中央公民館6F 第3・第4学習室

▲4月の講座：4月9日(日) 10:00～11:30
会場：まちだ中央公民館8F 第7学習室

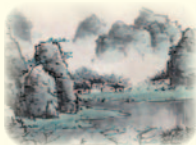
*録音機をお持ちの方はご持参下さい。

▲講師：植田渥雄先生
(現桜美林大学孔子学院講師)

▲定員：20名(原則として)

▲会費：1500円(会場使用料・講師謝礼など)

◆申込み：☎090-1425-0472(寺西)
E-mail: ukiuki65@yahoo.co.jp(有為楠)



◇わんりいの催し

ボイス・トレをして日本の歌を美しく!

●会場：まちだ中央公民館・視聴覚室
★動きやすい服装でご参加ください

▲3月28日(火) 10:00～11:30

▲4月25日(火) 10:00～11:30

●練習曲：「ひらけ」 詞: Chang Jung/曲: Emme

●講師：Emme(歌手)

●会費：1500円(会場使用料・講師謝礼など)

●定員：15名(原則として)

◆申込み：☎042-735-7187(鈴木)
E-mail: wanli@jcom.home.ne.jp(わんりい)



‘わんりい’は、いつでも新入会を歓迎します。

年会費：1500円 入会金なし

郵便局振替口座：0180-5-134011 ‘わんりい’

年度途中からの入会は会費の割引があります。

下記連絡先にお問合せください。

☎042-734-5100 又は E-mail: wanli@jcom.home.ne.jp

‘わんりい’の名は、‘万里’の中国読みから付けられました。文化は万里につながるの想いからです。

主としてアジア各地から日本に見えている方々と協力し、講座、研究会、鑑賞会、展覧会等を開催し文化的交流を通して国や民族を超えた友好を深めたいと願っています。入会されると、

①年10回(2月・8月を除く)おたよりをお送りします。

②‘わんりい’の活動の全てに参加できます。

問合せ：042-734-5100(事務局)

◆インターネット会員の制度もあります。アドレスを頂いた方に、毎月、カラーの美しい‘わんりい’をPDFファイルでお送りします。こちらは無料です。

◆町田各所でご自由に取って頂けます。上記へお問い合わせください。

2月18日(土)、飯田橋の日中学院での名誉ある倉石賞授賞式に、‘わんりい’メンバー14名及び‘わんりい’と長い付き合いのある中国の皆さん4名と共に参列しました。

会場は、黒板の上に、「中国語を勉強して、日中の架け橋になろう!」という趣旨の中国語が掲げられた教室二つを合わせた会場で、和やかな雰囲気が漂っていました。学院長先生のご挨拶では、長年日中友好に携わって実績を上げておられる自信とゆとりを感じ、そんな素晴らしい学院を創設された方の名を冠した賞の受賞に改めて嬉しさを感じました。

倉石賞の選考委員会は、学外から3名、学内から2名計5名で構成されているとのこと、今年は8件の候補が推薦されたそうですが、わんりいだけが満票で受賞が決定したとのこと。選考委員会の学外委員で早稲田大学教授・劉傑氏が選考委員会を代表した挨拶では、‘わんりい’の息

い’との関係性を話され、倉石賞の趣旨を思い、‘わんりい’の活動内容を知った時に、両方に関わりのあるご自身が是非推薦をしたいと思われたとのことでした。

続いて、日中友好会館中国代表理事・鄭祥林氏、‘わんりい’と長いお付き合いのある中国藝術研究会事務局長の三山陵氏のお二人より来賓の祝辞を頂いた後、表彰式で、賞状を寺西さんが、副賞を鈴木千佳子さんが頂きました。

受賞者挨拶では会代表の田井さんが、特に中国に限った活動ではないのに、名誉ある賞がいただけて、意外だったが光栄であると話し、長く活動が続けられた理由として、会の仲間たちが好奇心旺盛な人たちであったこと、活動を通じて知り合った中国の方々、人柄も才能も素晴らしい人たちであったこと、そして会の発足当時の社会情勢もあって、行政の支援と協力が得られたことを挙げて感謝をされました。

2017日中学院・倉石賞
「わんりい」が受賞!

の長い、幅広い活動にお褒めの言葉を頂きました。また、推薦者の花岡風子さんが、ご自身と日中学院、‘わんり

この挨拶は、周りの人々に印象深く受け止められ、この後の祝賀会の席上でも話題になっていました。中途参加の仲間としても、会のこのような姿勢が、わんりいを25年も継続させている原動力なのだと改めて感じ入った次第です。

(報告：有為楠君代)



①日中学院学院長・吉田隆司先生から祝辞を頂く ②表彰状を頂く寺西俊英さん ③副賞を頂く鈴木千佳子さん ④受賞記念パーティ ⑤受賞記念パーティで、演奏の銭騰浩(笙)さんと曹雪晶(二胡)さん

(写真撮影：河本義宣 / 木村武司)



この度、‘わんりい’
25年に亘る活動が「日
中学院・倉石賞」に選
ばれました。

「倉石賞」とは、日
中国交が再開された
1972年より21年前
の1951年に日中学院
の前身である「倉石中国
語講習会」を創設し、中国語

の教育に取り組んだ倉石武四郎先生の「日中友好の懸け
橋になろう!」との思いを生かし、1989年4月、日中
学院創立38周年、倉石先生没後15周年を記念して設
けられました。以来、当会の受賞ま
で19団体が表彰されています。

昨年9月末、日中学院副学院長
である鈴木繁先生より「倉石賞候
補の団体を求めている。その募集
要項を‘わんりい’に掲載して欲し
い」との連絡を頂きました。「倉石
賞」については、‘わんりい’の活
動に関して相談をし、指導も頂いて来た三山陵先生(首
都大学東京非常勤講師)が事務局長を務める「日中藝術
研究会」が、1996年第8回倉石賞を受賞しておりました
のでその存在は知っておりました。鈴木先生からの
依頼に、「倉石賞」がまだ続いていたことに驚き、‘わ
んりい’周辺の団体をいくつか思い浮かべてみたりもし
ました。が、‘わんりい’の活動がその対象になると思
っていなかったこともあり、いつかすっかり忘れてし
まっていました。

ところが、元日中学院講師であり、現在‘わんりい’の
会員にもなって下さっている花岡風子さんより、11月
上旬、「‘わんりい’を倉石賞候補に推薦したいので、こ
レまでの活動の資料を貸して頂けますか」との申し出
を頂きました。「推薦くださるなんて嬉しいわ。でも倉
石賞のような立派な賞の対象にはならないと思うけど
…」などと言っておりました。が、それから1か月も経
たない12月の半ば、「田井さん、‘わんりい’の受賞決
まりました」との連絡で、え、まさか!ありえない!!と

我が耳を疑いました。

‘わんりい’会則には「中国の文化、芸術の鑑賞、研究
を通じて、真の中国を理解し、併せて、日中両国人その
他、国籍や民族を問わず、自然で自由な人間的交歓と
交流を実現し、維持する事を目的とする」と尤もらしい
目的が書かれてありますが、会の実際の活動は、会名に
「市民サークル」が付くように私たち、普通の市民であ
るおじさん・おばさん達(ゴメンナサイ)が、中国と、そ
の先にある国々の文化に対する興味と好奇心をエネル
ギーにして面白がり楽しんで活動して来ているという
のが本当の姿です。ですから、倉石氏の「日中友好の懸
け橋とならん」という心には程遠いところで活動して
いたと思います。しかし、振り返ってみますと、中国の

皆様との温かな交流で培ってきた
相互のゆるぎない信頼感こそ両国
の懸け橋なのかもしれません。

‘わんりい’の活動歴は、会のHP
でご覧いただくとして、25年間、
‘わんりい’の活動に関わってきた
ものとして、これまでの活動を支
え、育ててくれたと思われる3つ

を選んで述べてみます。

1) ‘わんりい’メンバー達は好奇心旺盛

1992年、中国雲南の少数民族の「織と染め」に触発
されて中国語の勉強を思い立ち、4回の中国語体験講
座の呼び掛けをし、体験講座後、20名で中国語勉強会
が始まりました。1990年代初め、中国語に関心を
持って講座に集まった皆さんは、実は、日本的な「普通
の市民」ではなく、好奇心旺盛であり開放的で、ボラン
ティア精神溢れる人たちでした。すぐに意気投合し、教
室内だけの交流では飽き足らず、「先生の悪口をいう
会」として先生を呼ばずに、月1度の会食をするようにな
りました。「先生の悪口をいう」と言いながら、実は、
講師を受けて下さった、中国国家京劇院・武生役であ
る京劇俳優の張紹成さんが大好きで、この会食の中で、
先生の演ずる京劇を見たいと京劇鑑賞会を企画し、そ
の後、京劇鑑賞講座や中国民族音楽音楽会、京劇界の
名優として知られた王金璐先生を招聘するなど、次々
企画を立てて行きました。その後、中国語講座と同時



に始まった「気功と太極拳の講座」、活動を通して生まれた「京劇を楽しむ講座」の世話人が加わり、会の活動について連絡・相談する定例会と変わりました。定例会に参加される方達の出入りはありましたが、今も月1回、当初と変わらぬ心意気ある者達が活動についての基本的な相談をしています。

2) ‘わんりい’に関わった中国の皆さん達

当初の「わんりい中国語勉強会」講師・張紹成さんは、まだ20代後半の美青年でした。中国語の講師は初めてだったそうで、質問に答えられず頬を染める姿が初々しく、4、50代のおじさんやおばさんである中国語講座メンバーのハートをしっかりつかんだことが、‘わんりい’が始動する切っ掛けになりました。先生の京劇を見たいと開催した京劇は、京劇の花形・武生役の優雅で華やかな立ち回りあり、人情の機微に触れるコミカルな恋愛劇あり、まっ暗闇の中のスリリングな活劇ありでたちまち人々を魅了しました。

‘わんりい’が幸運だったことは活動開始とほぼ同時に、このような活動を通して、自分の将来を日本に託して来日した、高学歴で、自国の文化を背負った多数の、若く、魅力的な若者たちと知り合ったことかと思えます。会のメンバー達はこれらの若者たちと接することで、文革の影響もあって日本にあまり伝わらなかった生の中国の文化に触れ、純粋に感動しました。自分の居場所を求めている中国の若い皆さん達も私たちの感動に応えて快く協力くださり、共に同じスタンスのボランティア精神で活動を支えてくださり、活動外でも人間同士としての交流が今も続いています。

3)行政の協力

1990年代の初めは、当時急速に増えた来日外国人の皆さんに対して、行政がまだはっきりした施策を打ち出せないでいた時代だったと思います。町田市の場合、国際交流協会のような組織はなく、国際交流基金という、国際交流活動への助成金を用意されていました。活動内容の審査や決算報告に向けられる目は厳しいものでしたが、公からの助成は有難く、また、助成を頂くことで活動の姿勢を正し、各方面から信頼を頂ける会に育ったとも言えると思います。

活動はその後軌道に乗り、町田市に隣接する川崎市へ広がって行きました。川崎市市民文化室からは、恐らく室長さんの人柄もあったと思いますが、会の活動企画を持ち込む度、市庁舎内の記者クラブで記者会見を開いて下さったり、拙い手作りのチラシを市内全域に配布する手続きをして下さるなど温かく実質的な支援を頂きました。いまでも頭が下がる思いでいます。馬頭琴演奏では第一人者と言われるチ・ボラグ氏の故郷の小学校再建を目的にした演奏会、在日中国民族音楽演奏者を総動員しての演奏会他、1000席を超える市民館大ホールでの催しは満席になる盛況ぶりでした。

改めて推薦下さった花岡さん、‘わんりい’のこれまでの活動を評価下さった選考委員の諸先生、そして‘わんりい’に関わった全ての方々に感謝の気持ちでいっぱいです。今後も、身の丈に合った「草の根」的な活動ながら、個々の皆様の好奇心を原動力に、活動を通して広い世界に目を向けて行けるとよいと思っています。

◆‘わんりい’活動報告

2017 新年会・シュワンヤンロウで新年を祝おう！

会場：麻生市民館・調理室 2017年1月28日(土)11:00~14:30

2017年の‘わんりい’の新年会は、はからずも春節元日と重なった。土曜日だったことと春節元日だったことで中国の皆さんの参加が例年より少なかったのは残念だったが、その代わり、これまで会場の定員の関係でお声掛け出来なかったネット会員の皆さんに「シュワンヤンロウ(羊肉のしゃぶしゃぶ)」を体験して頂けたのはよかったと思う。おかげで例年通り今年も賑やかな新年会だった。

川崎支部代表の山田賀世さんの挨拶と京劇は英雄豪傑役(花^ホ臉)の殷秋瑞さんが形だけながら豪快な乾杯の音頭を取って下さると、会場あちこちで‘わんりい’の仲良し仲間たちが、久し振りの再会で話しながら花を咲かせながら、鍋を囲んで舌鼓を打った。漏れ聞く話では‘わんりい’の新年会でこれを食べるから会員を止められないとか。え？本当ですか!?

さてお腹がいっぱいになった後は、恒例の余興タ

イム。佐藤紀子(張怡申)さんとお友達の菅野良子さんの二胡の合奏。続いて、漢詩の会の講座で、毎回、美しい中国語で心を入れて朗読くださる花岡風子さんによる漢詩の朗読。Emmeボイストレ講座による「ひとつの種」と「早春賦」の斉唱。最後は、殷秋瑞さんに中国語読みを指導頂いて全員で「北国の春」を歌ったが、なんと、殷秋瑞さんが、「『北国の春』を京劇風に歌えば」とのおまけ。文字では表現できないのが残念！

こんな事もあるから、やっぱり、新年会はやめられない。今年で参加されなかった皆さん、来年は是非！ご参加を!! ビンゴを楽しみ、河本義宣さんの指導で手締めをし、和やかに新年会を終了した。

報告：田井光枝

写真：河本義宣
佐々木健之

羊肉のしゃぶしゃぶで交流風景 おしゃべりをしながら一年ぶりのしゃぶしゃぶに舌鼓を打つ



さあ、新年会の余興の時間ですよお〜♪



↑二胡演奏の腕前を披露する佐藤紀子(張怡申)さんと菅野良子さん



◀「北国の春」を京劇的に歌う、京劇俳優の殷秋瑞さん



↑心を込めた朗読で、中国語で読む漢詩の美しさを伝える花岡風子さん



Emme ボイス・トレ講座のメンバーと有志たちが「早春賦」を斉唱

長野県のソールフード・おやきでほっこりしよう! 講師：岩田温子さん

2017年1月12日(木) 10:30~14:00 町田市民フォーラム・調理室

誰もが知っている信州の郷土食「おやき」。小麦粉に水を加えて、ねった生地・土地の野菜など、思い思いのあんをたっぷり包んで、焼いたり蒸したりします。山間部が多く、寒冷なため米の収穫量が少なかった信州ならではの小麦粉料理です。

会員の岩田温子さんが長野県青木村からはるばる講習の指導にいらして下さいました。東京でおやきの作り方を習う機会はないので、私は嬉しく参加しました。

おやきが人気があるその一つに野菜を多く頂けて、とてもヘルシーな点があげられます。今回も野沢菜、切り干し大根・人参、ナス・ピーマン、青菜の野菜たっぷりの4種類のおやきを作りました。

おやき作りは、先ず最初に小麦粉を耳たぶ位に滑らかに捏ねる生地作りの作業に体力と経験が必要です。'わんりい' ならではの4チーム、▶中国おやきの名手の呉躍鳳さんチーム ▶体力に自信がありそうなオーストラリアの青年チーム ▶パン作りが趣味の主婦チーム、そして、▶岩田講師チームのそれぞれのテーブルは、難なくおやきの生地を完成。その生地を寝かせて、用意の具を包んだあと、蒸して素朴なふるさとの味のおやきが出来上がりました。

おやっ? 中国おやきの呉さんが余った小麦粉で何か作っています。あっという間に粉を丸めて、砂糖を入れてひっくり返す。その手さばきの素早さに、周りから歓声と共にもう一度、もう一度とリクエストの声。通訳をしてくださる娘さんのイエリンさんはニコニコしながら「小さい時、よく母が作ってくれました」と。作品は仏さまの手の形で中国では「仏手」と呼ばれているとの事。また、講師の岩田さんからは中国の小麦粉文化の奥深



講習風景

さに感心する声があがりました。日中の小麦粉おやつの交流です。

信州でも最近はおやきを家庭で作る事が少なくなったそうですが、伝統的なふるさとの味を今回は日本だけでなく、中国、フランスそしてオーストラリアへ伝えることが出来ました。

(報告：塚田民枝)

【今日のメニュー】

① 4種類（野沢菜、切り干し大根、ナスとピーマンの味噌炒め、青菜）のおやき ②肉団子とキムチと豆腐のスープ ③もやしと春雨とセロリのサラダ ④黒糖羹



↑仏手



おやきを頂きながら国際交流



ヨウマイ
莜麦という燕麦の一種で、その成分がコレステロール値を下げたり、血流の改善に効果があり、ビタミン、ミネラルの多さなどで保健栄養食品として注目されつつある穀物があります。中国の北方、気候が冷涼な高地が原産地とされ、現在、山西省、内モンゴル、青海省が主な生産地になっています。



莜麦栲栳 (中国サイト「百度百科」より)
ヨウミンカオラオラオ

莜麦を食べさせるレストランを見つけました。健康食品としてアピールしているのか、明るい開放的な店で、入り口では女の人が小さな塊の莜麦を掌の付け根でグッと薄く延ばし、くるっと丸めて輪にして蒸し器に並べていました。「栲栳」^{カオラオラオ}という麺です。北京へ行く機会がありましたら是非お試しください。「西贝莜面

私はおよそ25年前から山西省の民間芸能や芸術、仏教美術に惹かれて山西省を度々訪れるようになりました。何度も訪れるうちに毎日食べる麺食の原材料や麺の形のバラエティの豊かさにすっかり夢中になり、いつのまにか麺を食べるといことも山西省を訪れる大きな楽しみのひとつになりました。山西省の北部では、今でも莜麦の他に高粱、アワ、黍、蕎麦などの雑穀が作られています。豆の種類も多く、これらはそのままお粥として食べたり、お酒や酢の材料になったりしていますが、多くは粉にされ、麺や餅¹⁾として食されます。

山西省へ行く度に麺食²⁾を大いに楽しんでいましたが、ある時から糖尿病になり小麦麺のような澱粉の多い食事は控えなければならなくなりました。楽しみが減ってとても残念だと山西省の友人に話したところ「莜麦」は食物繊維が多く、血糖値の上昇をゆるやかにするので糖尿病患者にお勧めの麺だと教えてくれました。以来、味も良く、舌触りも滑らかな「莜麦」は好物になりましたが、残念なことには日本では売られていませんし、栽培もされていません。

ネットで莜麦の和名「裸燕麦」や英語名「naked oats」を検索してみるとヨーロッパやカナダでは飼料作物として栽培されるほか、オートミールとして食べられているようです。そして、1997年にアメリカのFDA（アメリカ食品薬品局）は小麦や米と比べて含まれる澱粉の量が少ないことから2型の糖尿病に効果があると認定しました。カロリーは高いので食べ過ぎには注意をしないといけません、食物繊維が多く、少量を食べても腹持ちが良く、ダイエットにも向いているそうです。

最近北京に行き、王府井にある新東安市場の5階で

村」という名前です。

私は現在、競走馬用の飼料として輸入されている裸燕麦を購入し、お粥にしたり、さらにお粥からペースト状にしてフライパンで焼いてクレープのようにして食べています。動物用の餌を食べるのに驚かれるかもしれませんが、食べ始めてから一年、走るのは苦手のままですが元気に過ごしています。

現在長野県の山村に住んでいる私は、とうとう種子を入手し、昨年の11月に蒔いてみました。今はまだ苗は10センチぐらいのびただけですが、ゆっくりと成長しています。初めての試みなので今後どのようなことになるか心配ですが、多分6月頃に収穫が出来るのではないかと楽しみにしています。山西省では春蒔きで、秋に収穫の時期を迎えます。その頃にまた山西省へ行き、莜麦の収穫から製粉までの作業を見に行こうと考えています。秋晴れの黄土高原の山のとっぺんで、穫れたばかりの莜麦で麺を打ち、中国三大名酒の一つの汾酒を飲む。最高でしょう？

■注

- 1) 麺や餅：中国語では食用の粉を麵（面）、その粉で作ったうどんのような食べ物も麵（面）と呼びます。さらに中国語で言う餅はパンケーキやクレープのような物を指し、日本の餅とは異なります。
- 2) 麺食：日本語でいう粉食でしょうか。うどん、蕎麦や饅頭、クレープなど食用の粉で作った食品の総称。

＊東新宿に「山西亭」という山西省の郷土料理を出す店があり、莜麦の「栲栳」を食べさせてくれます。（日曜定休）☎：03-3202-7808、都営大江戸線東新宿下車徒歩3分。営業時間、11:00～15:00、17:30～23:30
<https://www.hotpepper.jp/strJ001134893/>

※ 4月16日（日） 於：麻生市民館・料理室で莜麦を挽いた粉食の講座を開催します。（詳細：4月号）

中国風格 中国国家画院版画作品展【入場無料】

【主催】中国国家画院 中国文化センター

中国国家画院版画院の研究員 14 名が、2014 年から 2016 年にかけて創作した各種版画作品 42 点を展示。中国版画画家伝統に根ざしながら大胆な芸術の創作を追求する新たな思考と試みを表現する

- 会期：2017 年 2 月 27 (月)～3 月 10 日 (金) (土・日休館)
10:30～17:30 (初日 15:30、最終日 13:00 まで)
- 会場：中国文化センター
〒105-0001 東京都港区虎ノ門 3-5-1 37 森ビル 1 階
- 問合せ：☎ 03-6402-8168 中国文化センター

世界各地でにぎわう春節の様子を写す

歓楽春節世界同楽写真展【入場無料】

【主催】(公財) 日中友好会館

- 会期：2017 年 3 月 7 日 (火)～16 日 (木) ▲(土日休館)
10:00～17:00
- 会場：日中友好会館美術館 (東京都文京区後楽 1-5-3)
- 主催：(公財) 日中友好会館
- 問合せ：☎ 03-3815-5085
日中友好会館文化事業部

※新年号で紹介の、満柏さんの
右の写真も展示されます。



正倉院の復元楽器を演奏する「天平楽府」の名演奏家と
アジアの楽師たち、天台宗、真言宗、日蓮宗有志による声明

シルクロード 絲綢之路音楽幻想

- 会場：東京文化会館・小ホール (JR 上野駅公園口改札前)
2017 年 4 月 4 (火)
▲ 午後の部：アジアの音色と声明 14:00 開演
▲ 夜間の部：ブッダの供養楽 18:30 開演
※開場は各開演時間の 30 分前です
※演目は古代シルクロードの名曲集・新作音楽集より
- 入場券：一般 5000 円 学生 2000 円
- 主催：アジア楽師連盟問合
- チケット申込：アーツプラン ☎ 03-3355-8227
(9:00～18 時/土は 15 時まで/日・祝休)

渡辺千昭写真集「聖山 永遠のジャングリラ」

(縦 25cm×横 26cm 131 頁 2017 年 2 月 20 日、発売)

仙境に生きる人々。大地と
天空が織りなす無限の光景。
山岳写真家・渡辺千昭の四
半世紀の集大成

著 者：渡辺千昭
出版社：日本カメラ社
定 価：4500 円+税



初心者のための【鶴川水墨画教室】

体験のお誘い

講師：満柏 (● 日中水墨協会会長)

- 場所：鶴川市民センター (町田市大蔵町 1981 駐車場有)
小田急線鶴川駅からバス
「鶴川市民センター入口」下車
- 曜日・時間：14:00～16:00
毎月第 2、第 4 (月)
- 体験参加費：1000 円
(見学無料/手ぶらで参加可)
- 問合せ：野島
☎ 042-735-6135



使用済み古切手と書き損じの葉書でご支援を！

日本スリランカ文化交流協会では、スリランカへの
教育支援の為、古切手と書き損じ葉書を集めています。
古切手は周囲を 1cm ほどを残して切り取り、
おついで折に田井にお渡し下さい。

'わんりい' 221 号の主な目次

京雑感(111)オープンの普及	2
論語断片(24)必ずや狂狷か	3
大連・長春・丹東の旅(その 5)	4
混迷の時代を拓くザメンホフの人類主義(11)	6
東西文明の比較(12)	8
スリランカ紀行⑮ 私の中のポロナルワ	10
「漢詩の会」講座報告⑧「登金陵鳳凰台」	12
「漢詩の会」講座報告⑨「过故人庄」	13
丹巴訪問・写真による旅日記①	15
2017 日中学院倉石賞・'わんりい' が受賞	18
わんりい活動報告「2017 'わんりい' 新年会」	20
わんりい活動報告「長野県のおやきの会」	22
ヨウマイ 被麦に惹かれて	23
わんりい掲示板	20

【3 月定例会開催日及び 4 月号おたより発送予定日】

- ◆ 問合せ：☎ 042-319-6491 (わんりい)
- 3 月の定例会：3 月 7 日 (火) 13:30～
- 4 月号おたより発送日：3 月 31 日 (木) 10:30～
場所：三輪センター・第三会議室です。

※ボイストレの会、漢詩の会の案内は、17 ページに掲載
してあります。